



パテック フィリップ・タイムピースの輝かしい歴史とそのオーナーたちの人生に光をあてる新シリーズ。今回は、第二次大戦中に米空軍中尉を務めたチャールズ・ワリー（写真上、右からふたり目）が、捕虜収容所で思いがけず手にすることになった1461モデルについて。

「なかなか理解し難いかも知れませんが」——そう言いながら、チャールズ・ワリーは、彼が最初に手にしたパテック フィリップ・タイムピースのことを語り始めた。それはステレンス仕様の1461モデルだったという。第二次大戦中にアメリカ第8空軍の中尉だった彼は、映画『大脱走』の舞台となったドイツの第三航空兵捕虜収容所で囚われの身となっていた。現在ミネソタ州セントポールに在住する94歳のワリーは、当時、6回目の爆撃ミッションに出陣し、撃墜されてしまったのだ。

1943年5月29日のその日、私はドイツ軍の防空施設を攻撃していたのです。爆弾を投下し、その軌道を目で追いかけていました。そして、ふと視線を上げると、大量の対空砲が炸裂しているではありませんか。ドイツ軍に見つかってしまったのです。パラシュート脱出を決行しましたが、ほどなく捕虜と

して捕まってしまうました。1963年の映画では、ステイブ・マックインが自由を求めてトンネルから脱出する捕虜を演じている。3つのトンネルを掘る作業は手づくりの道具や、現地労働者からかすめ取った道具を使って行われた。私自身は脱走に参加しませんでした。脱走しなかった捕虜のなかから見せしめに50名が処刑されたのです。そのうちふたりは私と一緒に穴掘りをした仲間でした。しばらくしてから、ドイツ人は50個の缶を収容所に運び入れました。一つひとつの缶に兵士たちの遺灰が納められ、それぞれに名前が付けられていました。

1944年3月のこと、収容所に届けられたある広告パンフレットがワリーの心を捕らえた。それは時計に関する小さな文書フォルダで、『パテック フィリップ』と書かれていました。資料請求用のクーポン券

が付いていたのです。とても高価な時計で、私には手の届かないものでした。それでもっと手頃なものがあつたら送ってほしい、お金は故郷に帰ったときに支払うから、と書き記しました。数カ月がたち、もうほとんど忘れかけていたある朝のこと、私の上官が収容所の司令本部からやってきて、ジュネーブから小包が届いている、と教えてくれたのです。時計メーカーのパテック フィリップからの小包でした。収容所の所長はこの箱の中身で私が看守を買収するのではないかと勘繰り、明らかに小包を渡したくない様子です。しかし、上官が言ってくれたのです。「所長、ワリー中尉のことはよく知っています。彼は小包の品物を楽しみにしており、悪用することなど絶対にありませんから」と。彼の個人的な後押しに助けられました。次の日に小包を開けてみると、そこにはワニ革製のストラップが付いた、完璧なまでに美しいこの腕時計が入っていたのです。ニュースは収容所中を駆けめぐりました。私の部屋の前の廊下には、長い行列ができました。みんなこの時計をひと目見たかったのです。それは大変な出来事でした。世界最高級の時計メーカーから、このようなものが収容所に届くなんて、それも捕虜個人の宛名で……。全く理解を超えていました。時計を手取るだけで、秒針を見るだけで、腕にはめるだけでワクワクしました。どれだけ多くの人々が「もう一度見せてほしい」と頼みにきたのか、分からないくらいです。

これは私個人の出来事ではなく、みんなの出来事だったのです。その後まもなく、捕虜たちは第三収容所を後にすることになる。アメリカ軍が進駐してきたからだ。

ある日、爆発音が聞こえ、煙が立ちこめているのが見えました。ついにアメリカの旗が揚がったのです。隣にいたフランス人将校が言いました。「私は自国の旗が好きだ。しかし、どんな旗であれ、旗が見えること自体がこれほどまでに嬉しいと思うことはない」と。

1945年4月29日、バットン戦車隊が進軍して収容所を解放するに至った。そしてワリーの22カ月の監禁生活にも、ついに終止符が打たれたのだ。

本誌では、パテック フィリップのタイムピースと、そのオーナーにちなんだ、心に残るエピソードを募集しています。お心当たりのある方は、lifetimes@patek.com までご連絡ください。



ワリー中尉が捕虜だった時に受け取った腕時計1461モデルは、1940年から1953年にかけて製作された。イエローゴールド、ローズゴールド、スチール、スチールとゴールドのコンビの4種類がある。

